中学校国語科の古典学習における絵画テキストの活用
ー「徒然草絵」を読み解くー

井上　泰

絵画テキストは，画題(物語，説話，仏典など)を文字テキストとは異なる独自の方法で語っている。しかし，絵画テキストは中学校国語科の古典学習において，物語や説話などの文字テキストを読むための補足資料としてのみ用いられている。そこで，本稿では，『徒然草』第 53 段「是も仁和寺の法師」を画題として描いた，原本住吉如慶筆・飯塚円貞広美模写『徒然草絵巻』(金沢文庫所蔵)と英一蝶筆『御室法師図』(個人所蔵)の語り(＝〈絵語り〉)を読み解く活動の実践を報告し，中学校国語科の古典学習における絵画テキストの活用を提案したい。

1．はじめに

現行の教科書には，文字テキストの学習に合わせて，絵画テキストが掲載されている。それらの使用目的を教科書や指導書から分析すると次のようにまとめることができる。

(1)作者の肖像を示し，作者像を捉える。
(2)古典テキストを読むための知識を与えたり，古典世界そのものを知る。
(3)物語や詩の情景を思い浮かべる。
(4)物語のあらすじを理解させる。

詳細な分析は別稿[*1]に譲るが，現在絵画テキストは，文字テキストを読むために掲載されているといってよい。絵画テキストは，絵画独自の語り(＝〈絵語り〉)を分析されないまま，教科書に掲載され，おそらく授業でも使用されているのだろう。では，絵画テキスト独自の語り(＝〈絵語り〉)とはどのようなものなのか。そして，中学校国語科の古典学習において，どのように絵画テキストを活用することができるのか。以下，本校中学2年生(122 名)を対象に行った「徒然草絵」を読み解く活動の実践を報告する。

2．〈絵語り〉分析

まずは，第 53 段を画題とした，原本住吉如慶筆・飯塚円貞広美模写『徒然草絵巻』(金沢文庫所蔵)と英一蝶筆『御室法師図』(個人所蔵)の〈絵語り〉を分析したい。

(1)原本住吉如慶筆・飯塚円貞広美模写『徒然草絵巻』

『徒然草絵巻』は第 53 段から二場面(便宜上，場面 1 と場面 2 にする)を選択し描いている。場面 1 は，次の本文の傍線部にある，法師が「鼎」を被って舞い，その場が大いに盛り上がった場面を描いている。ただし，『徒然草絵巻』では，「鼎」ではなく「鉄輪(かなわ)」を被った法師が描かれている。この点について，島内裕子氏は「徒然草の伝本」中に「『鼎(かなへ)』ではなく『かなわ(鉄輪)』となっている本」を見出し，「如慶が読んだ徒然草に「かなわ」とあれば，そのまま鉄輪の絵で描いてしまったのではないだろうか。」(308 頁。『徒然草文化圏の生成と展開』，笠間書院，2009)と指摘している。

> 是も仁和寺の法師，童の法師にならんとする名残とて，各あそぶ事ありけるに，酔ひて興に入るあまり，傍なる足鼎を取りて，頭にかづきたれば，つまるやうにするを，鼻をおし平めて，顔をさし入れて舞ひ出でたるに，満座興に入る事かぎりなし。

では，『徒然草絵巻』は本場面をどのように語り出しているだろうか。〈絵語り〉を読み解くために注目したいのは，画面右上に描かれた本堂(本堂の右横は閼伽棚)である。開かれた扉からは本堂の様子がうかがえる。中には磬架(けいか)(仏事の際に打ち鳴らされる磬を懸ける仏具。導師が座す礼盤の右側に置かれる。)があるが，法師は誰一人としていない。そして，本絵相は文字テキストには明確に語られていないものである。では，なぜ法師不在の本堂はわざわざ描かれたのだろうか。この絵相はもちろん本場面が「寺」を舞台にしているということを示しているのだろう。ただ，それだけではなく画面左下の，法師達が稚児と酒宴をひらいている絵相と関連づければ，仏道修行をせずに，稚児と酒宴をひらいている法師達という読みを誘発する。絵巻制作主体は，法師が「酔ひて興に入るあまり」「足鼎」を被って舞ったという文脈だけでなく，上に引用した本文の点線部から仏道修行を怠って稚児と酒宴をひらいているという文脈を読み取り，法師不在の本堂を描くことによって，それを語り出しているのである。

ところで，『徒然草』には連続する第 54 段にも仁和寺の法師が「いみじき児」と「遊ばん」として失敗する話がある。このことを考えると，第 53 段や第 54 段で批判されているのは，法師が稚児遊びに惚けて仏道修行を怠っているということだけでないだろう。真言宗の総本山である仁和寺の僧の稚児趣味による失敗談が連続して語られているからには，そこに仁和寺の法師への批判を読

み取ってよいのではないか。権門寺院である仁和寺の頽廃を暴露しそして批判するねらいが本話にはあるのではないだろうか。絵巻制作主体は，おそらくそうした批判を読み取り，酒宴の場の背景に本文には語られない絵相(法師不在の本堂)を描くことで，その読みを表現しているのであろう[*2]。

次に，場面2についてである。場面2は次の傍線部を描いたものである。

> 医師のもとにさし入りて，向ひゐたりけんありさま，さこそ異様なりけめ。ものを言ふも，くぐもり声に響きて聞こえず。「かかることは，文にも見えず，伝へたる教へもなし。」と言へば，又仁和寺へ帰りて，親しき者，老いたる母など，枕上に寄りゐて泣き悲しめども，聞くらんとも覚えず。

画面中央には左に医師，その医師に対座して「鉄輪」を被った顔の腫れた法師が描かれている。本図で注目したいのは，衝立の外から室内を覗く二人の女性と，建物の外から室内を覗く人々である。これらの人々は室内の法師と医師とに鑑賞者の視線を注目させる役割があるとともに，室内を覗くというその行為から，本文中にある室内の光景の「異様さ」を語り出す絵相としてある。そして，これらの人々もまた，場面1の本堂と同じように本文には登場しない。つまり，絵巻制作主体が表現の工夫として描き加えたものであり，『徒然草絵巻』はこの絵相によって室内の光景が「異様」であったことを語り出している。

(2)英一蝶筆『御室法師図』

本図は画面中央に鼎を被った法師とその法師の脈をとる医師とが描かれている。本図は『徒然草絵巻』(場面2)と同じ場面を描いている。だが，本図は『徒然草絵巻』とは違い，医師が法師の手を取り脈をはかっている。本文には，「向ひゐたりけんありさま」とあって，本図はその点を変更している。ただし，この変更は本文の「『かかることは，文にも見えず，伝へたる教へもなし。』」を踏まえている。では，この絵相は何を語りだしているだろうか。それは，病人ではないが普通の人でもない足鼎を被った法師が，なぜか慎重に診察されているその「異様」さであろう。向かい合う姿ではなく，慎重に診察されることでその「異様」さが増している。このように本図では，本文とは異なる描写に絵相を変更することで，本文の内容を増幅して語り出している。

以上が〈絵語り〉分析である。まとめると次のようになる。

(1)『徒然草絵巻』

(場面1)

本文には明確に語られていない法師不在の本堂を描くことで，仁和寺の法師が仏道修行を怠り稚児遊びに惚けているという文脈を語り出している。

(場面2)

本文には語られない室内を覗く女性と，医師の家を覗く観衆を描くことで，室内の光景の「異様さ」を語り出している。

(2)『御室法師図』

本文とは異なる動作(脈をとる)に変更することで，本文で語られている異様さを増幅して語り出している。

3．絵画テキストの使用目的

次に，上述した〈絵語り〉の分析に即して，各絵画テキストの使用目的について述べる。以下，絵画テキストおよび場面ごとに述べていく。

(1)『徒然草絵巻』

(場面1)

学習者は第53段からどんなことを読みとるのだろうか。次の記述は，第53段の内容を読み終えて，学習者に兼好が伝えたかったことは何かを考えさせて書かせたものである。

①酔っていても，興奮していても考えるべきことはあるということを伝えたかったのではないか，と思う。法師は酔って自分がこれからすることがどうなるかをよく考えなかったから鼎が抜けなくなったのだと思う。いくら楽しいことをしていても，自分の行動一つだけでその雰囲気が一気に崩れるなら元も子もない。

②兼好はこの話で調子づいておもしろいこと，おかしいことをするのも，度が過ぎると自分が痛い思いをする，ということを伝えたかったのだと思う。この話では，その悪ふざけで命まで危うかったのだから，そんな小さなことで患うというのは何だかもう気の毒でさえ思える。また，まわりの人も巻き込んでいるので，やっぱり程々にということなのかもしれない。

③軽率な，後先考えない行動がその後の己の人生を大きく変えることになりかねないから，冷静にきちんと先の事も考えて行動に移せということ。

それぞれの傍線部に見られるように，多くの学習者は法師が失敗した原因である「酔ひて興に入るあまり」から本話のメッセージを読み取っている。こうした読みは，例えば，本話を採録している筑摩書房『古典』の指導書(『古典　学習指導の研究　1』，155頁)に，「主題」として「酔った勢いで調子づき，後で取り返しのつかないことを招いた，ということ。」とあることから，他の学習場面においても同様になされるものと考えられる。そして，こうした学習においては，『徒然草』が批判して

いる仁和寺の法師達の稚児趣味は問題とならない。したがって，学習者は〈絵語り〉を読み解くことを通して〈他者の読み〉と出会い，自身の読みを拡げていくことができるだろう。そのようなねらいのもと『徒然草絵巻』(場面 1)を使用することができる。

(場面 2)

〈絵語り〉を読み解くことで，学習者は絵画テキストの本文には語られない絵相をもって本文の内容を語り出す手法を知ることができる。したがって，本図を読み解くことで，学習者の〈絵巻の表現〉についての理解を深めることができる。

(2)『御室法師図』

〈絵語り〉を読み解くことで，学習者は絵画制作主体の表現の工夫と出会うことになる。したがって，本図を読み解くことで，学習者の〈表現〉についての理解を深めることができる。

以上，〈絵語り〉の分析に即して，各絵画テキストの使用目的を述べた。

4．単元について

次に，絵画テキストを読み解く活動を，どのような単元において行ったのかを示すため，単元全体について述べたい。

○単元目標　『徒然草』を読み，〈心〉について考える

○時間　全 8 時

○単元構成

①「高名の木登り」(109 段)を読む…安堵から生じる〈心〉の隙について考える。(1 時間)

②「双六の上手といひし人に」(110 段)を読む…勝ちに囚われて冷静さを欠いてしまう〈心〉について考える。(1 時間)

③「猫また」(89 段)を読む…噂に囚われる意識について考える。「秋の月は」(212 段)を読む…自分で物事を理解しないことについて考える。(2 時間)

④「是も仁和寺の法師」(53 段)を読む…場の状況に浮かれてしまう〈心〉について考える。(1 時間)

⑤「主ある家には」(235 段)を読む…「主」のいない〈心〉について考え，学習のまとめを書く。(1 時間)

⑥まとめを読み，学習を振り返った上で，『徒然草』(序段)「あやしうこそものぐるほしけれ」について考える。(1 時間)

⑦原本住吉如慶筆・飯塚円貞広美模写『徒然草絵巻』を読む。(1 時間)

⑧英一蝶筆『御室法師図』を読む。「徒然草絵」を読んでのまとめを書く。(1 時間)

以上のような単元の中で絵画テキストを読む活動を行った。絵画テキストを読む活動は，「単元構成」の⑦，⑧にあたる。

5．授業構成

⑦と⑧の授業が具体的にどのようなものだったのかを指導案などで示したいところではあるが，紙面の都合上割愛する。代わりに授業の流れを簡単に述べておく。

⑦『徒然草絵巻』(場面1)と(場面2)を読む授業

1　本時の目的を知る。

2　本文と絵画を対照させて場面を特定する。

3　画面左下が何の場面かを確定した上で，画面右上の絵相に注目させる。

4　『法然上人絵伝』など磬架の置かれた本堂を描いたものを見せて画面右上の絵相が何を描いたものなのかを確定させる。

5　画面右上の絵相によってどのような話になるのかを考える。

6　まとめをした上で『徒然草』第 54 段を現代語訳付きで読ませて，絵巻制作主体が読みとったであろう『徒然草』の批判を読みとる。

7　場面 2 を見せて，どの場面か考え発表する。

8　本文にはない絵相を見つけさせて，工夫している点を考える。

9　本時のまとめ

⑧『御室法師図』を読む授業

1　前時の振り返り。本時の目的を知る。

2　本文と絵画を対照させてどの場面か考える。

3　本図はどの場面を描いているのかを発表する。

4　本文にはない絵相を見つけさせて，工夫している点を考える。

5　絵画テキストを読む活動についてのまとめを書く。

以上が簡単ではあるが授業の流れである。なお，授業は４～５人のグループを作り，話し合いや発表をさせた。また，教具の工夫として，電子黒板を用い，適宜絵画テキストを拡大したり，画面に文字を書き込み視覚的な認識が十分に行えるようにした。電子黒板については拙稿「中学校国語科の古典学習における電子黒板の活用―『竹取物語絵巻』を読み解くために―」(『中等教育　研究紀要』第 53 巻，広島大学附属福山中・高等学校，2013 年 3 月)で詳しく述べているので参照して頂きたい。

6．学習者の反応

では，絵画テキストを読む活動を経て，学習者はどのようなことを考えたのだろうか。「単元構成」の⑧で書いたまとめを次に引用する。

(1)『徒然草絵巻』(場面１)について

1　法師はお坊さんの「おきて」もやぶっているし，稚児と遊んでしまっているのに位が高いのはズルイなぁと思いました。

2　絵師は文章を読んだあとに自分が思ったことも加えながら人に分かりやすいようにこの文章のもつツボのようなもののヒントを示していると思いました。

特に思ったのが徒然草絵巻の場面１です。誰もいない本堂を描く所が，如慶が考えた兼好が思ったことのあらわれなのではと思います。兼好は同じ法師として少し皮肉をこめてこの文章をかいたのではないかと，絵を読んだあとに思いました。

１と２は絵を読むことで『徒然草』を読み深めているものである。特に，そのことは２の傍線部に明らかである。上述した絵画テキストの使用目的，絵巻制作主体の差し出す『徒然草』の社会批評を読み取り，『徒然草』を読み深める，ということができたようである。また，次のものは(場面 1)に限定されるものではないが，絵を読むことで『徒然草』の思索を読み取ろうとする学習者が確認できる。

3　二人とも，法師を本文よりおかしく描いていた。法師のまぬけな感じを強調することで兼好の思索がより見た人に伝わるんじゃないかなと思った。兼好も二人の絵かきさんも法師を批判している。法師はいろんな人にばかにされて，しかも病気になって…。法師みたいにはなりたくない。

その他，場面１を読み解くことの効果として，２の点線部にあるように，〈絵語り〉(＝如慶の絵画制作行為過程)を理解することができる点もあげられる。また，場面１については次のような意見も見られた。

4　如慶は法師が修行にはげまず，遊んでいて頭に足鼎がはまってしまっているのを表しており，当時のふざけている法師を痛烈に批判しているようだった。英一蝶は，法師と医者のやりとりをリアルに絵に表現していた。あきらめてしまった医師をうまく表せていると思った。本文からでは読みとれない出来事も正確に絵におこしていてすごいと思う。

5　住吉如慶が書いた絵巻の場面一では本文中には出てこない本堂を書くことで本堂には誰もいなくて皆が遊んでいる様子を遠回しに表しているのはすごいなと思いました。

それぞれの傍線部にあるように，学習者は絵師の工夫に対して賛嘆している。場面１の〈絵語り〉は学習者にとって興味深いものであり，こうした〈絵語り〉に出会わせることで，〈絵語り〉への理解が深まることが期待される。

(場面２)について

1　絵師は原文を読み，自分なりの解釈を持って絵を描いていたのだと思った。「異様」というのを表すにはどうしたらいいのだろうと考えた結果，野次馬を描く事にしたのだと思う。視線の一つとっても何らかの意味が込められていると捉える事が出来るので興味深いと思った。

絵師達は絵を「見る」人の興味をそそる，注意を引く為にいかに印象的にかけるのかという事を重点的に考えながら絵を描いていたのだと思う。自分の絵を印象的に描く事によって，その文をより面白くさせよう，読み手に考えさせようという意図があると思った。

2　徒然草の絵にはいろいろな情景を一度にかいている。なので医者のところにやじ馬がいたりと少しちがうが，それぞれの絵にいろいろな意味がこめられており，絵も深いなーと思った。

それぞれの傍線部にあるように，学習者は〈絵巻の表現〉を理解し，興味をもったようだ。特に，１の学習者は目の前の表現が生まれるまでの時間や絵師の思索を想像している。場面２についても，上述した絵画使用目的(〈絵巻の表現〉について理解する)を達成することができた。ただ，学習者に〈絵巻〉と限定して理解させるには他の絵巻で同様の手法を用いているものを読ませて確認していくことが必要である。今後の課題としたい。

その他，画面を注意深く読み，楽しみながら絵を読む学習者の姿を確認できたので引用しておく。

絵は心配している様子や楽しそうな様子がよく伝わってきます。人物の服や体の向きなどから多くのことを読みとることができました。絵の中で重要な人は大きくかかれていたりした工夫があり面白いと思いました。やじ馬のめつきなどもよかったです。「御室法師図」では医者が法師の脈をはかって困った顔をしていたりしたのでたいしたことじゃないのに来るなと言っているような気がしました。絵の力はすごいと思いました。

(2)『御室法師図』について

1　文章にそってかいてある部分や付け足してかかれている部分があってとてもおもしろいと思いました。付け足してかかれていることで，どの場面のどういう状況なのか分かったり，どういうことが当たり前の時代なのかが分かったりしました。『御室法師図』が重要な人物が大きくかかれていて強調されていたり，医者と法師の異様などが分かりやすくかかれていたりしたことで，その場の状況が鮮明に思い浮かべられました。こんな風に昔の人が絵で色々なことを伝えていたのはすごいと思いました。

2　絵で表すのはやっぱり難しいんだなぁと思った。描かれた絵の工夫されている点を読むと絵の作者が作品をどう読むかによって絵も大きく異なってくるんじゃないかと思った。特に野次馬や薬を作る人が描かれている点で「とても異様だ」ということを強調しているというのがすごいなぁと思った。

3　絵巻を見るのは本文を読むのとは別のおもしろさがあるなと思いました。特におもしろかったのは法師が薬師に診てもらう場面です。「徒然草絵巻」ではやじ馬がいたり，薬師の弟子があやし見るなど法師を異様なものとしておもしろがっているが，「御室法師図」では医師がしんけんで弟子は薬を調合しています。ぼくは二つには違う虚しさがあるなと思いました。そこから作者が違うといろいろ違うとこがあって見るのが楽しいと思いました。

それぞれの傍線部にあるように，学習者は『御室法師図』の表現の工夫を理解し，そうした表現に興味をもっている。『御室法師図』においても，上述した使用目的（〈表現〉についての理解を深める）が達成できたようだ。また，『御室法図』には限定されないが，活動全体を通して〈表現〉について理解を深めた学習者のまとめを引用しておく。

4　文字を書くことのできない絵で文章の場面を描くというのは難しいことだけれど，他の物や人を描くことによってその場面を表現することができている作者はすごいと思うし，描かれている人一人一人に意味があるので面白いなと思いました。他にも注目すべきところはたくさんあるし，絵を描くことによって世の中を批判することもできていて，この絵を描くためにどれだけの時間をかけたのか，どれだけの時間をかけて考えたのかなどを考えると読み取れることはたくさんあるなと思いました。また，人によって読み方が違い，作者の考え方がわからないところも面白いなと思いました。

5　絵師は本文にあることだけを描くのではなく，見る人に本文の様子がよりよく伝わるように背景，人物の大きさや表情など細かいところまで工夫したり，本文にはないものを描いたりしているのですごいと思った。

6　この徒然草絵に限らず，原本と絵にしたものとでは少しずつ違いがあるということに気づいた。そもそも原本を絵にする人が原本の作者と違うので原本が言いたかった正確な光景を完璧に再現することはほぼ不可能である。又，原本をそのまま絵にしても絵がさびしい時もある。そういう時は原本本来のストーリーを絵の作者が自分なりに読み解き，「こうじゃないか」という状況を絵に上書きするのであるが，その時点で一歩，「原本本来の絵」から離れているのである。徒然草絵でも描いていない老母や童や医者の弟子が描かれている。原本そのままを絵にしたものも見ることはあるのだろうか。

このように〈表現〉についてさまざまに思索する学習者を確認することができた。また，上述したこと以外の学習効果について確認できたので引用する。

昔（江戸時代頃）の人は，徒然草を読んで，ただ教訓を得るだけでなく，それを工夫してつけ加えたりしながら絵にすることで，更に教訓を強めていると思う。「是も仁和寺の法師」も，ただ文を読むだけより，絵も一緒にみた方が，調子に乗りすぎると痛い目にあってしまうということが更に強調されて，「こんな目には遭いたくない」と思う気持ちも強調されたと思う。今回は「是も仁和寺の法師」しか絵を見ることはできなかったけど，書き手や描かれた時期によって変わっておもしろいと思った。

「更に教訓を強めている」としている点については検証が必要だろうが，古人の描いた絵画テキストを読むことで，古人の古典享受について考えている。〈古典に親しむ〉ためには，古典テキストにアプリオリな価値があると認めそれを読みとろうとするのではなく，学習者が主体的に古典テキストを読んでいかなければならない。古人が古典テキストを様々に読み表現したことを知ることで，学習者が自身の古典テキストの読み方について考える契機とすることができ，そうした経験を経ることで〈古典に親しむ〉態度も醸成されていくだろう。こうしたことも絵画テキストを読む学習効果の一つである。

7．おわりに

これまで「徒然草絵」の〈絵語り〉を分析し，その分析に即して使用目的を考え，『徒然草』学習の中に組み入れて単元化し，実践したものを報告してきた。改めて振り返ると，『徒然草絵巻』（場面 1）では，絵巻を読むことで学習者の第 53 段への読みが深まり，（場面 2）では，〈絵巻の表現〉についての理解を深めることができた。『御室法師図』においても〈表現〉について理解を深めることができた。このように〈絵語り〉に即して絵画テキストを使用していくことで，絵画テキストを用いた活動を拡充させることができる。そして，そうすることは古典学習の拡充にもなる。古典学習を拡充するものとして絵画テキストを読む活動を位置付けていくことができるだろう。

最後に，こうした絵画テキストを読む活動と「小学校『国語科』教科書の〔伝統的な言語文化〕」とのつながりについて述べたい。

『日本文学』第63巻第1号(日本文学協会，2014年1月)の特集「教科書と文学」で，竹村信治氏(「何を読むのか」)は，「小学校『国語科』教科書の古典『文学』」が「『我が国』を越えた『言語文化』一般へと広く拡張され，その可能性を大きく拓くこととなった」ことを指摘した上で，次のように中等学校における古典教育の課題を指摘している。

> さて，問題は，そうした「言語文化」体験を経て中等学校に進学する生徒たちにどのような「蓄積された様々な経験や知識などの「知」」の「継承」を教科書に用意し，いかなる新たな経験を教師が学習活動として提供するかだが，これは容易なことではない。小学校教科書教材の充実の多くは中等教育「国語科」古典教材の繰り上げ採用に負っている。学習活動も，枕草子初段の扱いに見るように同断。その結果，中等学校古典教室はその蓄積を小学校に抜き取られ，やがて空洞化しかねない状況なのだ。(中等学校教員の多くは小学校教科書を見ないからこの状況を知らない)。そこに迎えるのが拡張された「言語文化」学習のなかで古典「文学」と出会った生徒たちだ。冒頭，「学習指導要領」改訂後の小学校「国語科」教科書が中学校，高等学校の教科書，指導内容に大きな改訂をうながすことになろうと述べたのはこれによる。

稿者も「小学校教科書を見ない」中等学校教員の一人で御高論を読み目が開かれる思いがしたが，そうした指摘の中で注目したいのが，小学校における「言語文化」拡充の中に，絵画テキストを読む活動が組み込まれているということである。論文では「言語文化」の拡充について，次のように分析されている。

> 「言語文化」一般への範囲の拡充は「学習指導要領解説」の内容定義三種によってすでに方向づけられたことだった。その内の「多様な言語芸術や芸能」は教科書編集の場で一層ひろく受け止められ，「解説」に補足的に例示された「言語文化への興味・関心を深めるために，浄瑠璃，歌舞伎，落語などを鑑賞することも考えられる」が重く扱われて落語が主教材化し，さらにそれを超えて能・狂言(三省堂五年「しびり」，教育出版五年下冊「附子〈木下順二〉」，光村図書六年「柿山伏」など)，地域伝統芸能(東京書籍六年下冊)，絵画の教材化へと展開している。とくに絵画は挿絵(竹取物語〔光村図書五年〕・源氏物語〔光村図書五年六年・教育出版六年〕・平家物語〔光村図書五年六年〕・徒然草〔三省堂六年〕)として用いられるほか，三省堂三年「何をしているのかな」(高山寺蔵・鳥獣人物戯画絵巻)「絵巻物を知ろう」(鳥獣人物戯画・鼠の草紙・長谷雄草紙)，光村図書六年「ものの見方を広げよう　『鳥獣戯画』を読む」(信貴山縁起絵巻「飛倉巻」，伴大納言絵巻・上巻も掲出)「読み取ったこと，感じたことを表現しよう　「この絵，私はこう見る」」(風神雷神図屏風)の各単元で「読むこと」の対象として取り上げられている。(傍線は引用者，傍点はママ)

傍線部にあるように，小学校教科書では絵画が教材化され，さらに絵画を読む教材が採録されている。こうした活動は，自ずと本稿で提案した絵画テキストを読む活動とつながってくる。小学校でこうした授業を受け，知識技能を身につけた生徒に対する授業としても絵画テキストを読む活動は意義のあるものとなるだろう。また，竹村氏は中等学校古典教室の課題を指摘しているが，その課題をクリアする方法の一つとして絵画テキストを読む活動を位置づけていくことも可能だろう。

以上，絵画テキストの活用について述べてきたが，〈絵語り〉に即して絵画テキストを活用することで，さまざまな学習効果をもらたし，それをもって古典学習を拡充させることができる。さらに今後の中等学校の古典教室の課題に応えるものとしても行うことができるだろう。

【注】

*1　拙稿「絵画の教材化—古典学習の拡充に向けて」(『国語教育研究』第54号，広島大学教育学部国語教育会，2013年3月)

*2　絵巻制作主体が権門寺院の頽廃を『徒然草』から読み取っていることは，絵画の画面構成の点からも言える。『徒然草絵巻』の画面左の法師達の配置は，稚児を侍らせた老僧が画面で一番高い位置で，舞う法師や笑いころげる法師はその下にある。老僧は法師達を見下ろして楽しんでいる。さらに，老僧と他の法師達との部屋は分けられている。これらから老僧と法師達との立場や位の違いが描かれていると言える。そして，そのような構図からは稚児遊びの主催者は老僧であるとの読みも誘発される。指導の立場にある老僧が稚児遊びを主導しているのであるから，そこに権門寺院の頽廃を読み取ることは可能である。

○依拠本文

・新編日本古典文学全集…徒然草

○絵画テキスト依拠資料

・特別展図録『兼好と徒然草』(神奈川県立金沢文庫，1994年)…「徒然草絵巻」

・『江戸の風雅—旧きを知り　新しきを創った絵師たち』(群馬県立近代美術館，2012年)…「御室法師図」